

三月十八日

内藤備後守内

小林 祐 康

(召捕一條書付控)

尙ほ斯外、尾ノ道の物外和尙に關する臺雲寺の始末書も亦、同じ日に出した。其後、大阪の藩邸では、和尙の所持品につき、處分方の協定を遂げ、三月廿二日、小林が町奉行所へ出頭した。而して三浦藩次郎に面會し「此書面え御泥み被下候ては、内實心配も致候間、誠の御内覽に入候迄」の旨を述べて手づから渡した。すると三浦は一應眼を通して「御尤の次第に付、御預り申すでござらう。吟味方心得にも相成る。受取書は後より差出すことに致さう」とある。其書類及び雜物金銀左の通。

- 一 中紙六枚。 一 手拭一疋。 一 藥一ツ、つばめ口入。 一 法衣一ツ、但腰衣共。
- 一 袈裟一ツ。 一 懷藥一ツ、但坪入。 一 藥一ツ、但毒物入。 一 禪衣一ツ。 一 蒲團二枚。
- 一 單物一ツ。 一 金拾金兩壹步壹朱、但封の籠。 一 百錢六枚、以上の金銀は和尙が臺雲寺へ預けてあつたもの。
- 一 書類、小河一敏齋藏書古文通、外十三種。 (召捕一條書付控)

小林は再び三浦藩次郎を訪ひ、嵐康引渡萬事滞り無く相濟んだ御挨拶として、内藤備後守の名で、例の袖の下を使った。金品は如左。

- 一金千疋 三浦藩次郎 一金五百疋 杉原作十郎 一金五百疋 酒井 惣助 (召捕一條書付控)

外に小林一個人よりとして、延岡産蠟燭五斤を藩次郎へ贈つた。而して内々問合をしたのは甲斐實作の一件。實作の事績は彼の傳「甲斐實作事績」の題下に讀るが、和尙と同時に召捕られたので、其後も入牢中である。仍つて其の處分方を書面で伺つて見たが「實作儀、夫れは御心配にも不及、居村に御差戻被成、若し相尋候儀も有之候はゞ、其節御達可申、萬一出奔致候はゞ、其段御届被成候て宜敷候」(召捕一條書付控)といふ回答。

其の警固の一行歸國については「以手紙得貴意候、然ば今朝御内談御座候今般御引渡相成候嵐康に御差添への衆御歸國の儀最早御用無之候間、御勝手次第、御歸國相成可然奉存候。右貴所様にも御歸阪相成可然奉存候。右の段得貴意如此御座候以上」(召捕一條書付控)と言つて越した。而して兩三日滯留を達せられてゐた臺雲寺も亦「勝手次第たる可し」との事。ま

だ和尙の乗物の處分が残つてゐる。「嵐康乗物之儀、持歸候ても致方無之品に付、御奉行所にて、被成方も可有之哉、同心酒井惣助へ内談致候處、委細承知致し、受取可申儀申聞候に付、其儘御門前溜りに差置候」(召捕一條書付控)とある。寔に好個の記念品、惜いことであるが、當時では、其氣味も悪く、物騒千萬な物でせうから仕方が無い。

斯くて渡邊平兵衛、古川桂太郎は、江戸へ歸府す可く、小林は、大阪へ歸邸す可く其日、京都を後にしたが、居残つた安井三松、佐々木、赤坂、竹村、臺雲寺も廿四日に引拂つた。和尙の人相書を抄録しやう。

- 一、丈 中。 一、色 青白き方。 一、顔 平たく圓き方。 一、眉毛 尻少し下り、厚き方。
- 一、髭 厚き方。但眼の下より一面に有之。 一、眼 丸く尻下り。 一、口 廣き方。
- 一、鼻 高き方。 一、齒並 よく小く。 一、耳 小く常体。 一、骨 太く肉付候方。
- 一、舌舌 高く強き方。 (召捕一條書付控)

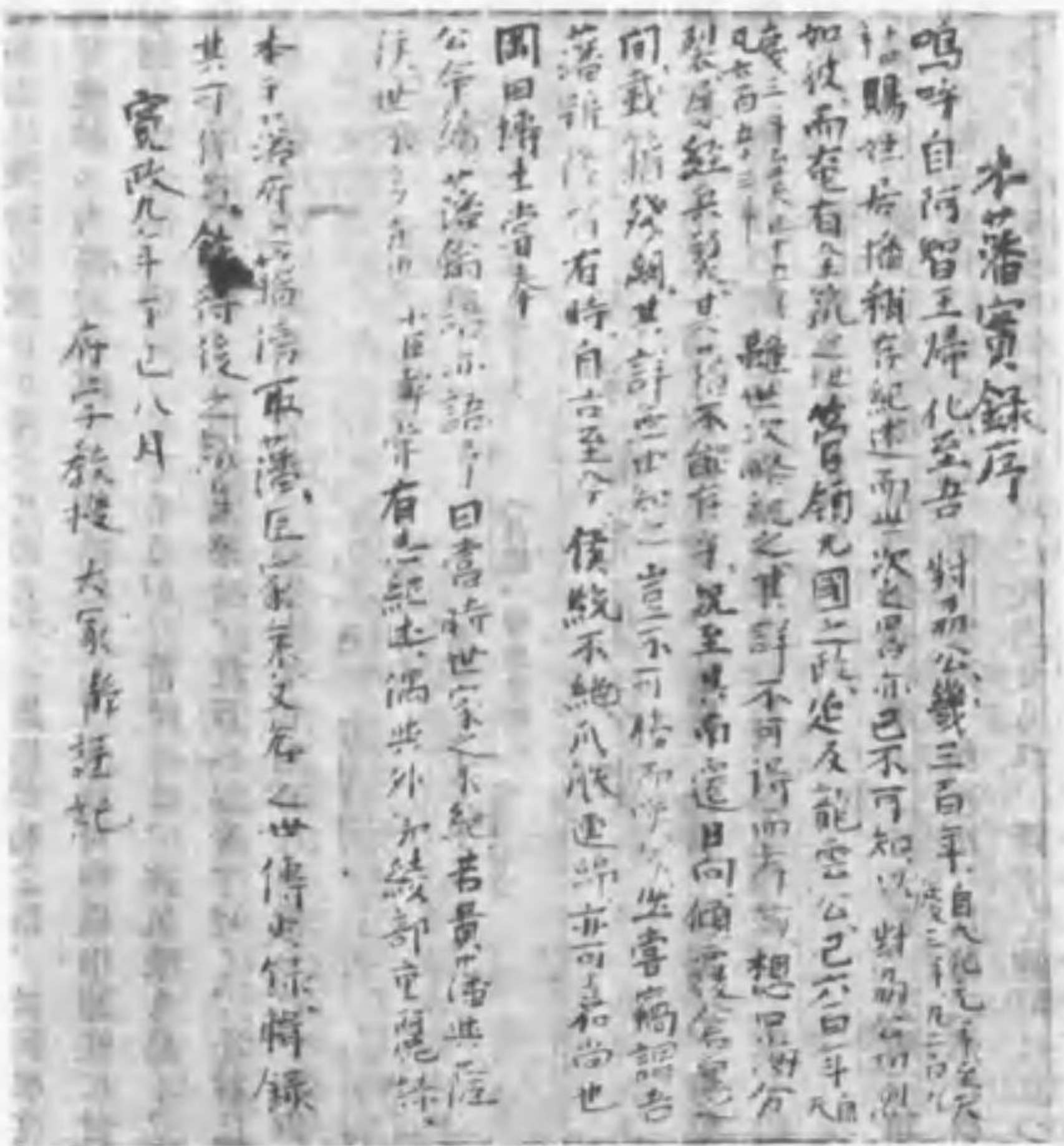
大塚靜先生の事

字は子慎、通稱太一郎、觀瀾と號す。梅樓、拙齋、冬扇子。考槃窩は皆其別號であります。父君は氏真、母堂は紫垣氏。先生寶曆十一年四月の御出生、安永六年十一月、藩主種茂公、責を給し遊學を命じたまふ。仍つて京都の宇井默齋翁に師事し、從學一年にして藩に歸りました。

二十歳大阪に遊び御牧直齋、山口剛齋に學ぶこと三年、天明三年、江戸に役し、世子種徳公の師傅となり、傍ら幸田、柳田澁井諸氏及服部栗齋に就て正し、岡田寒泉、頼春水、尾藤二州に學び、六年歸藩。寛政元年種徳公封を襲き藩に就く。四年又江戸に役す。其頃服部栗齋、幕府に優遇せられ、講堂を麴町に立つ。栗齋時に先生をして大學を代講せしめました。歸藩明倫堂の教授となり、享和元年世子種任公(種樹公の實父)の傳となり、江戸に赴く。文化六年總奉行に擢任せられ、藩政に參與し、兼て藩侯の侍講となり、特に學政の振興を掌る。文政二年其積年の功勞を賞し、別墅を賜ふ。八年八月致仕、九月病卒、享年六十五。其著頗る多く、本藩實錄、本藩系譜、本朝正學淵源續錄、國朝儒先別錄、螢雪錄、觀瀾集、國學私議、負笈紀聞藩官考、數學大意、竹葉錄、藩祖事略、本朝正學淵源錄、國朝儒先錄、諸老略傳、螢雪續編、觀瀾手錄、高鍋孝子傳、觀瀾七説答或人書、朱子論性說講義、備寒錄等々。

大塚先生御記述の本藩實録

高鍋藩士橋尾炳新(宮崎地方裁判所判事)が、宮崎市小戸神社附近(橋邊三丁目東入)に御住まられた頃、御譲り下さった一巻であります。見返しに「本藩實録」と刻った印を捺してあります。



(六十五百第版圖) 序録實藩本の生先塚大學藩鍋高

此の書は高鍋藩儒學大塚静先生の御記述であります。先生が此の巻之一を御書きに成り、後の人が巻之二、巻之三と書き繼いだのであると傳へます。先生の自序と凡例等を左に掲げませう。

嗚呼自阿智王歸化、至吾對州公、幾三百年(自大化元年至天慶三年凡二百九十四年)賜姓居播、稍存記述而世次之略亦已不可知、以對州公功烈如彼而奄有全筑之地、管領九國之政、延及龍雲公、已六百年(自天慶三年至天正十五年凡六百五十二年)雖世次略紀之、其詳不可得而考焉、想四海分裂、屢經兵燹、其籍不能存乎、況至其南遷日向、傾覆倉皇之間、載籍殘闕、其詳無由知之、豈不可勝而歎哉、然嘗謂吾藩雖隆替有時、自古至今、侯統不絕、爪朕連綿、亦可嘉尚也、岡田博士嘗奉公命續藩輪譜、亦語予曰、當時世家之不絕、若貴藩與薩侯、世不多在也、小臣靜嘗志紀述、偶與外弟綾部

重麗謀、本于藩府之籍、傍取藩臣家乘、又考之世傳史錄、輯錄其可信者、錄待後之識者云。

寛政九年丁巳八月

府學教授 大塚 靜 謹記

凡例

- 一 此書記述に關るといへども、時世久遠、且つ戰國の間、記載に乏しければ、遺實分ちがたきことあり。暫く、その信すべき者を著して、後人の補缺を待つべし。
- 一 諸記記事の異同、今一々定めがたし。故に、あまねくこれを歴舉して參考に備ふ。地名及び姓名年月亦然り。
- 一 舊記諸書、侯事にあづかるものは、その文を改め、尊稱を加へ、これを別異す。たと九州記、筑紫諸軍記より取るものは、その本文に従ひ、その文を改めず。
- 一 右諸記諸書ありといへども、その事大に異なるに承らす。數百年の後、その實を得がたしといへども、恐ば大に違ふに懸らん。
- 一 本藩家臣の記すものは、侯家を尊奉するの心より主張大過を免れず。九州記、筑紫軍記、西國太平記等各その記者主張實録の所一ならず。しかれども、その大要は、大に異ならざれば、大にたがふまはみへず。讀者これを察すべし。

引用書目

- 一 記 本藩古來記する所。
- 一 秋月氏一統系圖 何人の爲れる所を知らず。古來より藩中に傳ふるもの。
- 一 秋月軍功日記 筑前秋月の藩士某(元來本藩の藩臣のよし姓名しれず)記述して黒田侯へ上りし覺へ書きにて實録のよし、慶長十一年三月十二日と記せり。黒田藩臣尾江牛右衛門と云ひし人、藩中大將甚右衛門へ贈りしよし跋あり。尾江が跋にも、世間軍記とは相違の所ありて、戦場等相違なきよしなり。
- 一 記 藩 四本 藩臣小田岡右衛門知則記述、鏡記重慶、豊島敦、千手興武が家、古來より傳ふるものなり。小田氏記述本藩の舊記を抄録して、自書實公至種美公、其備。
- 一 九州 記 一 陰鑑大平記 一 筑紫軍記 一 群書類從
- 一 戸次軍次 一 編年小史
- 一 日 本 史 水滸
- 一 選 史 中井 棧 巻

右自序等で三葉、次の第四葉から本文に成り、公家淵源に起筆し、春實、種光、種茂、種弘、種雄、種幸、種家、種賴、種資種貞、種高、種順、種道、種忠、種氏、種照、種朝、種時、種方、種實、諸公の御事跡を録し、卷末に一詩を題してゐます。

豈圖世道險。惟悲城陷時。公子奔山口。邦君沒後陵。關國爲赤地。臣民將何歸。幸得風雲興。一麾復舊降。偉哉再造業。勇智啓後規。

右 恭賦 西林公復故事

大塚 御 拜稿

記事圖版出所の事

記事、圖版とも一一出所を明かにしておきましたが、校正の際、見おとしたのを茲に録しませう。

『宮崎縣大観』より拜借(圖版)

落合雙石先生遺影 秋月天放先生遺影、坂田秀先生遺墨 伊東祐相公遺影

『讀書人』(宮崎圖書館報)より拜借(記事及圖版)

佐土原藩藏版 鴻瓜詩集 政陽公の詩語碎金 三字經 史略等

内藤子爵家より拜借(圖版)

内藤政樹公遺影 露沾公遺墨等

佐土原より江戸までの旅行記

美濃紙七十三葉、中葉八行、行二十字乃至二十五字。安永年中のもので「白筆本」であります。文もうまく、歌が四百十六首あります。

佐土原藩士越智某(富田氏御先人)の遺文。藩主に従ひ、江戸に往かれた時の日記、當年の陸海路が詳しう分る貴重な文獻であるとおもひます『安永四乙未の年二月すゑの五日に』と書き起こしてあります。さうして『けふ出て、いつかへるへき故さ』と思ふ心は流石わりなき』とよんであります。

『松の馬場』を過る頃。馬上にてよめる。

武蔵短すがに掛けて乗駒に老の心もいさむ松陰

『一つ瀬川』を渡るによめる。

けふひと日渡り初ぬるひとつ瀬やすゑは八十瀬の旅路逢けき

一つ瀬川邊までは馬で往つたが、ソコからは駕に乗り替へてあります。

それより駕籠に乗て『やまた坂』を登るに。

老の身の登るに高きやまた坂下るとならはいかにうれしき

それより坂を過『平井倉』といふ所迄いたりぬ。此所は佐土原と高鍋との境なり云々。

それよりゆく程に、高鍋の内『水谷坂』といへる坂の上に云々。

高鍋の御城山を行手に仰ぎ見れば、折しも櫻の花一時に綻ひて、さながら雪の氣色、かくあめれとおもひ出てよめる。

足曳の山は雲路に高鍋や花はましろの雪にまがひて
それよりほごなく『尾丸川』といふ川に著ぬ。此川より乗來る馬とも故郷へ返すとて馬の口附なる者駕近く召よせて、故

郷へ言傳ども申送る云々。

それより、川をわたり行程に『金原』といへる所にいたりぬ。思へば此所は、かへるさには故郷より迎の者、かれいひなごもて来るよしなどおもひ出てよめる。

ふるさとの使をまつの下蔭に待見ん時やこころいかなる

これ等の記述や詠草により離愁の胸に満ちてゐた事が分ります。さうして佐土原地方の旅立には、此の『金原』迄送り、歸著にも亦此の地迄サカムケをしたと覺えます。

それより『垂門』といへる川を渡るとて云々、又試みといふ川をわたるとて云々。

それより『名貫』といふ川原まで至り、此所にて故郷よりもてきたる餉などたうべて、しばしやすらひける云々。

『津野』といへる驛に至りぬ。爰にて又しばし路の傍に駕をすへて、古郷より送り來たれる駕の者どもをいとま遣して返すに、又おもへば、此所はかへるさには、いつもどまりの宿なればかくおもひつけはへりぬ。物の名にしてよめる。

此宿とおもふうれし歸るさの旅寝の枕いつの頃にや

もろどもに行か歸るかどばかりのことはさへにいひも盡さぬ

それより行程に、日も夕陽の頃なるに、美々津のこなたなる石並川をわたるとてよめる云々。

申の刻半過て、美々津といふ驛に至り、此所に一とよやどりの云々。

朝も曉天に佐土原を立ち、夕の申の刻半(午後五時)美々津に著し、翌日卯の刻過る頃(午前六時)美々津をアトにし、駕の内て故郷に送る手紙など書きつゝ、『金が濱』『笹野』『植見川』『新町』を過ぎ、牛の刻(正午)過ぐる頃『細島』につき、同地の御手洗といふ家に休んでゐます。が、ソコには宿らず、スグに船に乗るのであります。

たどり寄る旅の細道島蔭の是はやこよひの泊り成るらん

かくいひて茶などたふべ、しばし程ありて船に乗れど人の告來りしまゝ船にのりて。

心細島山かけて詠めやる入日の西やふるさとの空

同じく船に乗りし祝言をのへ侍る。

旅の行程

日和よしとことぶく船の道すがら千里の波の末長閑なれ

翌二十七日は、天氣の都合で船を出さず、細島に泊り、二十八日卯の刻(午前六時)過る頃出船、ソレから『尾末』『枇杷島』『轟(土々呂)』『赤水』を過ぎ、申の刻(午後四時)に『島の浦』につく。ソコが第四日の宿泊。二十九日卯の刻(午前六時)過ぎて『島の浦』の港を出る。こゝは日向と豊後の境であります『蒲江』沖を過ぎ『深島』を通り、申の刻(午後五時)過る頃『米生津』につく。

三月朔は曉天に『米生津』を出で『大島』に暫く潮がかりし、やがて又漕ぎ出だして、暮近き頃『帆戸の湊』に碇をおろしたが、『米生津』の前に『日向泊り』といふ所があつたことを書き加へてゐます。

二日の朝は辰の刻(午前八時)『帆戸』を出で『永目』の湊にとまつた。晝の頃から雨となり、三日、四日、五日は空は晴れても風吹きすさびて、又ソコに泊つたが『浦白』の明神へ『日和請』の祝ひ上げなごしてゐます。

六日の朝、卯の刻(午前六時)過る頃『永目』を出でて『竹生島』を眺め『佐賀の園』にいたり『臼杵の城山』や『沖にむく島』や『高島』を過ぎ、巳の刻(午前十時)過る頃『上の關』に碇をおろしたが、此の日入浴の御暇をたまはり、皆々上陸、關の權現に参りなごしたが、七日、八日、九日、共に日和悪く船泊り、十日やうく追風となり、卯の刻(午前六時)過る頃『上の關』を出る。

こゝ九州の境なれば、かくおもひつけ侍りぬ。

九州の國の境を漕ぎ離れ雲や霞のあとの追風

『尾鼻』といへる所に至る、是より四國の伊豫地なれば、かくよめる。

いつしかに尾はなかな筋をこぎ過てあとに見送る關の遠山

其の日は『三机』の湊に泊り、十一日卯の刻(午前六時)過ぎて、船は出たが、風激しく波高く『高濱』に往く可く努力しても追つかなく、吹かれ、流され、千辛萬苦して、申の刻(午後四時)安藝の國の『沖の御室』といふ島に漕ぎつけ、いづれも初めて、人ごころがついたやうな次第、大變な事でありませぬ。其夜雨も降り出で、風も荒く、湊の内さへ騒々しく、藩主を始め、一行の人々、皆逢もる雨を凌ぎ、夜を明かしたのであります。

十二日午の刻(正午)『沖の御室』を出で、酉の刻(午後六時)『かろうと』に漕ぎ入り、十三日朝まだきに出で『戸極島』を眺め『猫の瀬戸』を過ぎ『御手洗』で潮待ちをして、程なくソコを出で、夜に入つて『下岩毛』に泊る。

岩毛を通る頃、月明らかにして、何となく四方のけしきとも打詠め、尙故郷の事も忍はれて。

おもふ事誰に岩毛の浦傳ひ月の御船とともにかがる

佐土原といへる浦有と聞て、我故郷の名なれば、かくはつふやくものならし。

ふるさとの名をしおもへは心あてに見ても過うき佐土原の浦

同じく十四日、夜ふかく『下岩毛』を漕出で、今や弓削のうらを通るならんなど人にたつねければ、夜明て人のいひしは

弓削は曉の頃通りぬるよしを聞て云々。

ソレから『柄の津』に潮待し、程なくソコを出で、『泉水島』を廻れば雨が降り出だす。

ふり出し雨もいとす友船の真帆に片帆に追つれてゆく

雨もしきりにふり、風もあらしきゆへ『泉水島』を一廻りめぐりて、又もどの『柄の津』へ入けるまゝ云々。

ソレから『田島の口』を弓手に見『藻島』を望み『箱崎の山』も遙かに、申の刻(午後四時)過る頃『白石』に入港、ソコに

泊り、十五日卯の刻(午前六時)ソコを出て『下津井難』を過ぎ『やうか嶽』を仰ぎ、讃岐富士(丸龜の山)を眺め『大筒小

筒』『日比の瀬戸』をすぎ『出崎を湊』『大島』『いぬ島』『失よりか島』『牛窓』を通り『播磨』の山など望み、申の刻半(午後

五時)過る頃播州の『室の津』に漕ぎ入つた。ソコには、柳河の大守や、丸龜の城主や、佐賀藩主の船が集ひ、湊の内は大に

ぎはひである。

室の津の所せき迄さしつどひ岸邊につなぐ千船百船

翌十六日、藩主一行は播磨路をとられるのでソコから上陸になり、外の者も船に泊まり、十七日水陸、わかれゝに進んだの

であります。

おもひきや須磨や明石の浦波に春の夜ふかき月を見んとは

それより、真帆に片帆に引つれて行内に、風たゆみ明石の少しこなたなる沖に、潮かゝりどて船をどめ、碇をおろし侍る

春の夜の月も明石の浦近く潮待程の波のうたゝね

蓬の窓より、陸のかたをのそみ見れば、人家もあまた見へけり。いづこそと人に問へば、上須磨なりとおしへしまゝ云々

『岩屋の迫門』はいつこの程なるらんと船人に問へば、夜のほどに、過けるよしいへるまゝ

撰枕夢はかりなる浮寝していつか岩屋の迫門を過けん

ソレから『一の谷』の沖に潮がもりし『ひよどり越』を詠めなどし、やがて碇をあげたが、風も逆に、雨も降り出でゝ雲あや

しく起る中を播洲『兵庫の浦』を漕ぎ過つて『北濱』に泊まつたが、暮れかゝる頃より、東北の風はげしく、和田の御崎明神

へ『日和請』の願ひなどすべく、船長は上陸する。

明くれば二十日、風風ぎ、波静になる。御座船で金鼓を鳴らすと、友船残りなく寅の半刻(午前五時)に漕ぎ出だし『西の宮』

をすぎ『尼か崎』の沖を通つて大阪に着いたのでありますが『老の身の難波の事か浦の波おもひかけすも六十に近くながらへ

来て、今はたこにきたるものかなと身を觀じ侍りぬ』と書いて感激してゐます。

それより小舟に乗りうつりて、川をのほりに『土佐堀』の上なる御館に着ぬ。すぐに御祝言など申あげて、わか旅やどに

かへり見れば、藤屋何がしの内なり。

同じく廿一日の暮ちかき頃、難波のとまりを出て、それより川船に召され、伏見のかたへどのほらせたもふにそ、友船も

あまた粧ひ、乗出すにそ、われも同じく川舟にて云々。

『牧方』などもいつ過しどもおもへず、春の夜ふかき川舟のそこはかどなき名所、みずに通行蓬屋形に觀をなかし、

すでに夜も明、柳の岸に舟をつなぎけるを、起出で爰はいつこならんと問へば船人の『橋本』なるよし云々。

『淀の渡』を通り『山崎』『寶寺』『八幡山』を詠め、やがて伏見につき旅宿にとまり、こゝに海路の旅は終つたのであります

が、廿三日『伏見』を立つて『七瀬川』を渡り『みつの御山』を拜し『四條寺町』なる原隆院に参り(この院には藩祖の御墓

かあるといひます)伏見に戻つたのであります。

二月二十五日佐土原を發し、三月廿日大阪に着いてゐますから、二十六日かゝつてゐるが、ソレから東海道五十三次をゆく

であります。

彌生廿五日、伏見を旅たち、けふより東路のひまや傳ひ、千里のあゆみをはしめける云々。

『墨染櫻』『藤の森』『谷口』『深草野』『大龜谷』『藪下村』を過ぎ、京と伏見の追分を過ぎ『音羽山』『音羽川』『逢坂山』『逢坂の關』の趾『走り井の水』を過ぎ、『大津』の驛に至り、『石場』『打出の濱』『矢走』『膳所』『真野の入江』『粟津が原』『堅田の浦』『石山寺』『勢田の長橋』を過ぎ、やがて『草津』の驛につく。こゝで晝食をものし、又ばつ／＼行くのであります。が『鏡山』『三上山』『伊吹山』『梅木村』『石邊』の驛で其の日は宿る『陸路第一日』であります。

廿六日(陸路第二日)『石邊』を出て『夏箕の里』を通り『田川』『横田川』『水口』の城下『松の尾川』『いな川』『大野村』『そとの白濱』を過ぎ、『上山』で晝食をすまし『幾野』『田村川』『鈴鹿峠』ソコには近江と伊勢の國境のしるしの木立が茂り『猪の鼻』『猪野筆捨山』『坂の下』ソコで駕をすゑて休らひ『鈴鹿川』を詠め、暮れかかる頃『關』の驛に著く。

廿七日(陸路第三日)『關』を立ち『關の小川』『いつはの森』『龜山の城』『庄野』の驛に休らひ『山の邊』『石薬師』ソコで晝食『四日市』『日永村』を過ぎて『桑名』の城下に宿る。廿八日(陸路第四日)桑名より船に乗り、七里の灘を渡り『熱田の浦』にとまる。

廿九日(陸路第五日)また夜をこめて熱田を立ち『笠寺』の觀音を拜し『鳴海』『芋川』『油鯉餅』『猿投の御手洗』『三河の八ッ橋道』の石碑『大濱茶屋』『矢はぎの橋』『岡崎』の城下『藤川』『赤坂』を過ぎて『御油』の驛にとまる。

三十日(陸路第六日)『吉田』を立ち『ふた川』『白須賀』を過ぎ、『遠江灘』を詠め『參河遠江の境橋』をわたり『濱名の橋』『橋本』『荒井の渡』『今切』といふ關所を通り『舞坂』にとまる。四月一日(陸路第七日)舞坂を立つ『けふは更衣の日なれど旅の行手なれば、衣もかへあへず、おもふばかりにてうち過ぬ』とあり『笹原』の堤のはどりに休らひ『濱松』の驛で晝食し『天龍川』を渡り『油田』の宿に休らひ『中泉』を過ぎ、『見附』で止まつたが『大井川』かどまつたといつてゐる。

二日(陸路第八日)己の刻半(午後十一時)迄『見附』に在て、やう／＼晝ならんどおもふ頃、先のとまり明ける由告來つればはや『見附』を立て行程に、豊坂、大久保、みかの松など聞へしまま云々』とあり『ひとこと坂』『みかの橋』『袋井』『掛川』ソコで晝食し『日坂』で日は暮れたがマダ宿にもつかず『小夜中山夜の道、人の勢をおもひて歩にて越行に、竹の杖ついて、

松明をほさせ、行ほどに道すがらよめる』とあつて『月くらき小夜の中山中々にともしをしるへ今越てゆく』と詠む。

やう／＼たどり行程に『菊川』といへる所に著ぬ。かくて、やう／＼夜も半なる頃『金谷』といふ驛に著てどまりぬ。

三日(陸路第九日)暁天に立つ『大井川』水深けれど、恙なく渡りて『島田』に著く。ソレより『瀬戸川』『藤枝』を過ぎ、『岡部』に宿り、四日(陸路第十日)『宇津の山』を越へ『鞠子』で休らひ『阿部川』を渡り、『府中』で晝食し、『藍染川』を望み『待乳山』などの噂をきき、『小吉田』の里に休らひ『江尻』『姥か池』『三種の松原』『清見寺』『清見が關』の趾『奥津』『薩摩峠』を登り『油井』の驛にとまる。

五日(陸路第十一日)『蒲原』をすぎ『岩淵』にいつた頃、空霽れ氣澄みて、富士の秀峰がよく見える。坂を下つて『富士川』をわたり『うるひ川』をすぎ、『吉原』の驛で晝食し、『浮島が原』『拍原』『原』を経て『沼津』の驛にとまれば又雨と成る。

六日(陸路第十二日)『三島』を過ぎて箱根路をたどるのであります『笹野』『山中』『二子山』『さいの川原』『峠』の關所『かしの木坂』『猿すべり坂』『島』『湯本』をすぎ、夜にいつて『小田原』の驛でどまり、七日(陸路第十三日)『酒匂川』をわたり『こよろきの磯』『梅澤』『大磯』『鴨立澤』『平塚』『馬入川』『南郷』ソコで休らひ『藤澤』『戸塚』ソコで夜に入り、亥の刻(午後十時)『程が谷』に著き、八日(陸路第十四日)『神奈川』『川崎』『なまま』『大森』ソコで休らひ『鈴の森』を通り『品川』『大佛』ソコで休らひ晝食をすましたのであります。

かくて『大佛』を出て江戸三田の御館にまいり、二十あまりのどしをへだて、今の老の身のきたりける事こそ、實に夢の心地こそすれ、御殿作りも、むかし今はるかに替り、美しいいはん方なくおはへぬ云々。

佐土原を立つた二月二十五日より江戸に著く四月八日まで四十三日を費してゐます。兩刀を帯びた人でも、長い道中、不安はゴマン／＼があり、山賊があり、其の他、風土や氣候の難もあり、第一交通機關が備はありませぬから、無事安著の日には『夢の心地』がした譯であります。

佐土原より江戸までの旅行記

秋月長門守領内古圖

假に斯う名をつけず。地圖には名を題してゐませんが、舊高嶺藩の御領内の大部分のやうにおもひますから。

兒湯郡美々津町役場の所蔵。縦四尺四分、横五尺三分、淡彩を施した鳥瞰に近いもの、右方上部に左の如き識語があります。元祿十一年十一月江戸へ被遣小坂六郎左衛門中村伴右衛門へ御預け被置候繪圖之控。

識語の下方に「白杵郡高八十石四升、兒湯郡高壹萬貳千八百拾五石六斗四升、諸縣郡高三千貳百三十石六斗八升、宮崎郡高八百七拾五石八斗五升、那賀郡高壹萬三千六百貳十七石八斗」と記載してゐます。

上を西にして米良山の諸村、其の村の外は皆延岡藩領と覺はしく「堺、有馬左衛門佐領、米良領」としるし、一番上の所に「兒湯郡内鹿遊村高壹斗八升、通路より此村迄三里三拾五町廿四間」とあり、稍々北によつて「兒湯郡内石村高壹石五斗三升、通路より此村迄三里貳拾九町廿四間」とあります。

又「石村より鹿遊村迄牛馬通なし」「石村より坂屋村迄牛馬通なし」とあり、東によつて「兒湯郡内石村高百貳十五石四斗三升、通路より此村迄壹里貳町十貳間」「兒湯郡内川原村高百貳十石七斗五升、通路より此村迄壹里十町十貳間、はへ山有」南端部に「高四十貳石四斗七升、道路より此村迄壹里三町三十六間」とあり、村の名を誌してゐません。

東に移つて其の北部に「通路より堺迄壹里六町」「兒湯郡内丸山村高七石三斗八升、通路より此村迄壹里廿四町」「兒湯郡内田原村高十五石貳斗九升、通路より此村迄壹里九町三十六間」「兒湯郡内才勝村高八十石四升、通路より此村迄三町三十六間、はへ山有」「美々川舟渡廣壹町四十間」「此壹里山より堺迄拾貳町十六間、財部より堺迄六里廿五町十六間」など、ソコに「遠見番所」があります。

中央に「兒湯郡内上別府村高貳百二十五石三斗、通路より此村迄六町」「兒湯郡内落子村高百十七石三斗壹升、通路より此村迄十町四十八間、はへ山有」「兒湯郡内寺ノ追高百貳拾七石八斗七升、はへ山有」「兒湯郡内長野村高貳百三十三石五斗七升、

通路より此村迄二十四町」「兒湯郡内岩山村高五十七石六斗八升、通路より此村迄五町廿四間」

ソレから「兒湯郡内生村高六百九十八石九斗三升、通路より此村迄六町、はへ山有」「兒湯郡内篠別府村高九十九石貳斗壹升はへ山有」「兒湯郡内窪宮村高貳百三十八石貳斗、はへ山有」「兒湯郡内大池村高三百六十六石三斗二升、通路より此村迄壹町十二間、はへ山有」とし、少し上の方に「總合高三萬石秋月長門守領分」としるし、海邊に「兒湯郡内平田村高五百五十壹石八斗、芝山有」とあります。

中央に還ると「高城」とあり、其の脇に「古城高貳十壹間、堅五十間、横三十間」とあります。

兒湯郡内椎木村高千五百壹石八斗八升、芝山有。

高城渡し、瀬廣さ壹町四十間、歩渡、水出し時は舟渡。

兒湯郡内高城村高千五百拾八石壹斗五升、通路より此村迄貳町廿四間、芝山、はへ山有。

兒湯郡内上江村高千五百貳拾四石九斗六升、通路より此村迄十町四十八間、はへ山、芝山有。

高五百六拾七石八斗六升、通路より此村迄十三町拾貳間。

財部川、歩渡、廣壹町貳拾間、水出候へは舟渡。

兒湯郡内市山村高三十六石七斗五升、はへ山有。

兒湯郡内三納代村高八百八拾貳石貳斗、はへ山有、通路より此村迄十五町。

財部より堺迄壹里參十壹町。

右の上江村の下の方に「財部、秋月長門守居所」とあり「兒湯郡内財部村高貳千三百四十三石、通路より此村迄十七町廿四間はへ山、芝山有」とあり、すぐ東に「蚊口浦」かありますが「兒湯郡内日置村高六百八石五斗三升、通路より此村迄十七町廿四間」とあり、海邊に「遠見番所」があります。

以上で圖の内の記載を悉く抄きましたが、海邊の部分の記載を左に録しませう。

美々湊、川湊也。湊口北は岩、南は白濱、潮引し時は五枚帆の舟迄は荷積して出入有、潮満候時は舟出入自由、湊うち何風とても舟がより自由、大水出候時は時々湊替り候也。此湊より有馬左衛門領、なるしま迄舟みち三里、又蚊口湊まで舟み

ち七里、このみみみなど口深さ六尺、潮満し時は九尺川上に廿町潮入。此はへ、湊口より貳十町。黒島湊口より貳十町。此水底はへ、湊口より十七町。蚊口湊、川湊、左右白濱、荒磯也。潮引候時は船出入なし。潮満候時は五枚帆の舟までは荷つみして出入××、湊内舟かり場、何風にても悪し。大水出候へば、時々は湊替候也。湊口より沖迄三町程つき磯ばへ有、此湊より島津万壽領、徳が淵迄舟路三里、此蚊口湊口深さ貳尺、潮満候時は四尺川上に拾町潮入。川の名は、一つも誌して無く「此川廣さ七間舟出入なし」「此川廣さ三間舟出入なし」「此川廣さ四間舟出入なし」「此川廣さ廿五間舟出入なし」「此川廣さ八間舟出入なし」とするすばかりですが、外に次の如く識しております。心見川××渡、廣さ十四間。津野川廣八間、はし有。名貫川、かち渡、廣さ貳十間。水少出候へは、××にて渡り不相成、舟わたりなし。此川かち渡、廣さ八間。垂門川、歩渡、廣さ十貳間。垂門川、かち渡り、廣さ八間。財部川、歩渡、廣壹町貳拾間、水出候へは舟渡。

日向文獻史料 正篇終

記事目録

- 飯野に於て上梓せる碧巖録
 眞幸院は行政地蔵(一) 碧巖集古版考(二) 書物之趣味第五號(三) 谷村一大郎翁(二) 日州眞幸院長善寺(四) 眞幸院はマサキノキ(一〇)
 眞幸院(一一) 眞祈(一二) 飯野古事記(一三) 大日本地名辭書(一四) 兜率山長善寺(一五) 長善寺の地點(一六) ラクノモト(一七) 長善寺の御住持(一八) 壽宗宗江院(一九) 月照山宗江院(二〇) 眞幸院領主(二一) 久兼公の任官(二二) 惣領公、義天公(二三) 北原周防守
 証書(二四) 碧巖錄の上梓期間(二五) 長善寺明憲妙光師傳(二六) 明憲妙光師傳法嗣(二七) 天海活葉釋師(二八) 南天祖生釋師(二九) 義芳光圓釋師(三〇) 一榮西釋師閉山(三一) 史料の排列に就て(三二)
 飯野に於て上梓せる聚分韻略
 日向版聚分韻略(三七) 古版展覽會(三七) 春村一大郎翁(三九) 聚分韻略序(四〇) 日向版を三重韻と呼ぶ(四一) 内閣文庫御蔵本(四二)
 聚分韻略刊行考(四三) 書刊影譜(四四) 書物展覽會第二卷第十一號(四五) 三重韻の由来(四六) 韻略の内容に就て「群書備考」(四七) 四體千字文問版(三八) 文明版聚分韻略(三八) 聚分韻略の韻を三段に(三八) 北原氏第六世兼季會(四〇) 印刷文明史(四〇) 初めて眞實を書き得た事(四〇)
 佐土原に於て上梓せる四體千字文
 日本古刻書史等々(四二) 正開制度に就て(四二) 結時の四男七郎左衛門(四二) 佐土原城再建(四三) 金拍公(四四) 大光寺の由来一冊(四四)
 七寶山祖帳(四五) 弓削筑前(四五) 佐加利の弓削氏(四六) 上梓者弓削雅樂入道(四六)
 島津家傳來の建久圖田帳
 史籍展覽會(四九)
 栗田先生の纂訂古風土記逸文
 序、凡例(六一) 引用書目(六四) 古風土記逸文目次(六六)
 古風土記逸文考證
 總言(七一) 日向、國號(七二) 高日村、曾國朝(七四) 竹園守之女(七六) 徳生村(七八) 吐魯暹、駱馬、頭風(七九) 風土記に就て(八一)

榮西禪師の喫茶養生記

飯野留傳數年(八三三) 御留孫山權現社(八三三) 御留孫山多寶院福山寺(八四四) 喫茶養生記序(八五五) 喫茶養生記奥附(八八八) 妙門學四傳(九〇〇)

日向國舊地考全文

白杵郡高千穂嶽(九五) 楠三喜一宮巡詣記(九五)

永友翁の神祇史料

神祇史料序及例言(一〇五) 官幣大社宮崎神社(一〇六) 神武天皇社略記(一〇六) 本宮舊記(一〇六) 古傳記(一〇六) 延喜式(一〇六) 職原抄(一〇六) 神皇正統記(一〇六) 和爾雅(一〇六) 源平盛衰記(一〇七) 國花萬葉記(一〇七) 鹿澤名勝考(一〇七) 日本古義(一〇七) 舊記(一〇七) 宮崎縣志(一〇九) 官幣社に被爲列度(一一〇) 鶴月神宮舊記(一一一) 飯野神社舊記(一一二) 有馬左衛門佐等附(一一二) 飯野神社舊記(一一三) 福山鎌倉口上控(一一三) 官幣社に被爲列度(一一三) 鶴月山寺御建立(一一五) 龜嶺快活記(一一五) 飯野神社舊記(一一五) 宮崎神社舊記(一一六) 國幣中社に被列云々(一一六) 延喜式(一一〇) 延隆世鑑(一一〇) 日向舊跡見聞録(一一〇) 神祇要録(一一三) 古事類苑神祇部(一一三) 鹿澤名勝考(一一三) 宮崎宮略略記(一一四) 日本古義(一一四) 鹿澤名勝考(一一四) 大發會總意書(一二五) 日本地誌提要(一二八) 官幣大社に被列度(一二九) 永友宗慶(一三三)

重訂神武紀集解の刊行

神武紀集解序(一三四) 同書刊記(一三六) 日向延隆大神實遺(一三七) オノコロウ日記(一三七)

森林太郎博士の帝諡考

天皇追諡の種類(一三九) 神武天皇以下御歷世(一三九)

西國日州高千穂古今治亂記

「高千穂治亂記」(一四五) 三田井家由來之事(一四五) 瀨人右武親武に仕る事(一四六) 高橋元種會向之事(一四八) 龜嶺山落城之事(一四八) 尋水書目(一四八)

高千穂庄神跡明細記

卷端の歳語(一四九) 記載の目録(一四九) 高千穂三田井の一部(一五一) 四王子峰(一五二) 高天原(一五三) 徳頼大明神(一五三) 荒立大明神(一五四) 二十柱王宮(一五五) 高神源寺(一五五) 天眞名井(一五六) 藤岡山(一五六) 神代川(一五六) 夜哭石(一五六) 天香山(一五七) 天香山(一五七) 南州男爵遺蹟(一五八)

高千穂の小侍庄屋辨指等

門割詞の實例の一(一五九) 小侍はコザマラヒ(一五九) 家中の士族の下に(一五九) 足輕は平右衛門格(一五九) 宮水役所手附(一五九) 尋水書目(一六一)

村岡先生の日本地理志料

凡例(一六一) 目錄(一六四) 日向國(一六五) 白杵郡「字頭岐」(一七〇) 水上(一七〇) 智保(一七〇) 英多(一七一) 刈田(一七一) 長井(一七一) 川邊(一七二) 美濃(一七二) 兒湯郡「古由」(一七二) 三納(一七二) 糠北(一七三) 大垣(一七三) 三宅(一七三) 都麻(一七四) 韓家(一七四) 平群(一七四) 都農(一七五) 去飛(一七五) 新納(一七五) 那珂郡「中」(一七五) 夜間(一七六) 新名(一七七) 六 田島(一七六) 於部(一七六) 那珂(一七七) 宮崎郡「三也佐岐」(一七七) 飯肥(一七八) 田邊(一七八) 島江(一七八) 江田(一七八) 八 宮崎(一七九) 石田(一七九) 教諭(一八〇) 藤間(一八〇) 諸縣郡「宇真加多」(一八〇) 財部(一八〇) 藤田(一八一) 瓜生「字判布乃」(一八一) 山鹿(一八一) 穂佐(一八一) 八代(一八一) 大田(一八三) 教貳(一八三) 亞柳(一八四) 野後(一八四) 夷守(一八四) 眞研(一八五) 水俣(一八六) 島津(一八六) 都洲古園の由來(一八七)

義泰公の六百番誦誦句合

御城平の御城主(一八八) 義泰公誦誦句合(一八八) 六百番誦誦句合作者(一八九) 御移封の御隨從(一九〇) 誦誦句合誦誦付(一九一) 露沾公一百姓(二〇六) 地方傳史書(二〇七) 明治以前佛人著誦(二〇八) 西山宗因(二〇九) 露沾(二一〇) 風處義泰公(二一一) 露沾(二二四)

日本數學史上の内藤政樹公

津老餘算點算等(二一九) 日本數學史講話(二一九) 點算といふ名稱(二一九) 算家の傳統(二二〇) 日本數學の發達期(二二〇) 日本數學の高調期(二二二) 久留島學(二二二) 方圓算經、無奇編(二二二) 宅間流其他(二二四) 久留島氏の算術(二二四) 有馬頼廉の拾遺算法(二二五)

内藤政陽公の詩語碎金

天保新刻、弘化改正新刻(二二七) 詩語碎金目錄、序(二二七) 延隆文學石川貞(二二八) 詩語碎金卷之上巻(二二八) 詩語碎金と詩語碎金(二二八)

- 二九) 標題及び刊記(二二九) 内藤敬樹、内藤政陽公(二三〇) 長子政常に與ふる書(三三三) 宮崎縣志(三三三)
- 延岡藩の漂著船定書 細島附近は高橋藩領(三三四) 延岡に仰付られた事(三三四) 其の御條目(三三四) 用人上田庫大等(三四〇)
- 對吳國船處分規程(三三四) 御家老上田氏(三四二) 河原新藏、芝新三郎(三四四) 宮澤文吾氏(三四五) 日野巖博士(三四五) 日向探樂記
- 賀來飛霞先生の日向探樂記 水筑大可先生と御交遊(三四二) 田中芳男氏、上原三郎氏(三四六) 飛霞先生著書目(三四七) 延岡藩の樂圖(三四八) 日向探樂記に關する追補(三五二) 延岡藩の樂圖と探樂(三五四) 本草學物類(三五四) 樂圖の開設(二五六) 延岡藩の探樂(二五八) 探樂行程(二六一) 高山傳藏翁遺誄(二六五)
- 水筑大可先生の極門韻語 新太郎翁の願下(二六六) 極門韻語序「長英」(二六七) 極門先生傳「魯水軒」(二六七) 天放翁稿(二七一)
- 寶泉寺惠教上人の寫した日向記 城ヶ崎寶泉寺御先住(二七二) 序、目錄(二七三) 日向地頭職事(二七四) 祐持御加恩地事(二七五) 祐時男子各別事(二七五) 祐持日州下向之事(二七六) 祐重日向下國事(二七八) 祐重郡於郡運事(二七九) 院御莊廿一ヶ郷之事(二七九) 三位入道之遺記之事(二八一) 佐土原の歌よめる人々(二八五)
- 九州治亂記二冊六卷 圖書解題(二八六) 耳川合戦之事(二八八) 眞實先生遺什(二九〇)
- 文之和尙の南浦文集 慶安二年刊行(二九二) 和友賢老時序(二九三) 書業書後(二九四) 目錄(二九四)
- 文之和尙の襟帶集 成實堂叢書第十卷(二九六) 江潮風月集(二九六) 七言八句の平仄(二九六) 體要集刊記(二九七) 別冊文之和尙傳(二九七) 漢學紀源(三〇六)
- 文之和尙の日州平治記 文之和(三〇六) 天放翁遺誄(三〇八)

- 宮崎縣史料目錄(三〇九) 小阜翁及び竹鼻翁(三一一)
- 日講上人の説默日課に就て 今を距る二百七十年(三一四) 覺、願首(三一六)
- 日講上人の大力作録内啓蒙 講門派總本山(三二二) 御流傳の經過(三三三) 拙著「神教史源日講上人」(三三九) 萬代龜鏡錄(三三九)
- 新刀辨疑に輝く日向の名工 田中問廣、井上眞改(三四二) 凡例(三四二) 關廣、關貞等々(三四七) 中心軌範(三四八) 井上眞改(三四九) 飯肥先人傳(三五四)
- 古刀銘盡 大全 自序、目錄、凡例(三五六) 卷末刊記(三五七) 堤清夢翁遺誄(三五八)
- 孫欲軒純粹一名島津戦法秘鑑 日州飯野水崎原戦法記(三五九) 日州高城耳川大友合戦々法記(三六一) 大開秀吉公薩人之日州高城合戦々法記(三六四)
- 舊鹿兒島藩の門割制度 東北西諸縣、兒湯等(三六六) 目錄(三六七) 門割制度第一項門の義(三六八) 門割制の年代(三六九) 門の組織(三七〇) 門の義務(三七二)
- 門地の檢注(三七二) 門割制と小作制(三七三) 門割地の所有權(三七五) 關藩土地制度(三七六)
- 佐土原藩譜及び雜記 佐土原藩譜(三七九) 雜記(三八一) 龜島武敏遺稿(三八二) 辭職制(三八三) 佐土原一揆編末(三八六) 崎南遺稿(三九〇)
- 鳴之口混雜御取扱壹卷 文武兩派の衝突(三九一) 武選派の所別(三九二) 御牧赤報先生(三九三) 佐土原藩弓場事(三九三) 牧野田清記等々(三九四) 島津漢路守忠持公(三九五) 日月星辰天地眼(三九七) 學習館と關する願願(三九七) 白鹿洞揭示、學則(三九七) 御牧赤報傳(三九九)
- 神崎翁の日向海邊之圖

- 天保三年巡遊録本(四〇〇) 延岡、高橋、飯肥(四〇〇) 巻末の通語(四〇一) 神崎次右衛門(四〇一)
- 泉光院大先達の修行日記 日本九峰修行日記(四〇八) 野田一寛、日向近世史(四〇九) 秋月小牧翁遺稿(四一一)
- 佐土原藩學習館蔵版
 - 小學の内篇と外篇(四一二) 郡司直助書(四一二) 上村義明及び上村氏系圖(四一三、四一四) 山崎點樓版四書(四一六) 後藤點四書(四一八)
 - 賜板通行といふ語(四一九)
- 伊能忠敬先生の日向沿海測量
 - 九州第一次測量(四二〇) 九州第二次測量(四二二) 諸侯と忠敬(四二二) 忠敬の測地事績(四二四) 千田宮崎縣知事遺稿(四二六) 福山精尾翁の詩(四二六)
- 伊東祐相公の如蘭集
 - 如蘭集序(四二九) 伊東祐相公(四二九) 安井息軒先生の碑文(四三〇)
- 雙石先生御自筆の論語統及外二種
 - 佐藤一齊外十五家(四三二) 論語統、周易統、孟子補義(四三二-四四四) 磯貝勝藏氏餘韻(四四四)
- 雙石先生の鴻爪詩集の板木保存
 - 詩名備名を壓す(四四五) 芋門公序(四四六) 篠崎小竹序(四四七) 鴻爪詩集の板木(四四九) 板木と刊本の比較(四四九) 御自筆の鴻爪詩集(四五三) 平島煙香翁遺稿(四五四)
- 飯肥藩緒山仕込に就ての融貫事情
 - 飯松藩御定文(四五五) 緒仕法言合定體文(四五六) 惣役所奉行(四五七) 追加定體文(四五八) 大坂留守居佐土原等々(四六〇) 仕入銀、下し錢(四六〇) 黒木孫右衛門(四六一) 飯肥御蔵元油屋善兵衛(四六一)
- 飯肥藩の名醫桑原先生の産航
 - 香川剛齋の門下(四六四) 産航序二贊(四六四) 産航跋(四六五) 目録、例言(四六六) 創生、打倒術(四六七) 日本醫學史(四六七) 壹岐編

- 關(四六八) 桑原惟親(四七〇) 舊地考の著者(四七一)
- 息軒先生御自筆の志濃武草
 - 名を正、字を元(四七三) 博書志序、安井清遠(四七三) 息軒先生の和文(四七三) 息軒先生の和歌(四七七) 松崎先生遺墨跋(四七七)
- 息軒先生一行と名勝家一郷
 - 高橋、和田、平部、阿良(四七九) 南山書樓跋(四九二) 關師曾一郡書遺跡(四九二)
- 息軒遺稿と斑竹山房の印
 - 息軒遺稿目次(四九二) 息軒遺稿序、川田剛(四九三) 息軒遺文序、芳野世育(四九四) 第一種本と第二種本(四九五) 三計塾記と學規(四九六) 五百頁の豫定を越へて(四九八)
- 息軒先生御自筆の宮崎軍記
 - 息軒先生の體語(四九九) 日向の關名所歌集(五〇一)
- 讀書餘適の續篇續々篇發見
 - 例言三則(五〇二) 送安井仲平東遊序(五〇六) 讀書餘適序(五〇七) 續津濟翁遺文(五〇九)
- 息軒先生御手澤の論語註疏
 - 内藤子爵家御藏本(五一〇) 巻末の體語(五一〇) 原時行氏(五一〇) 學問士風二種(五一二)
- 秋月古香先生と山高水長圖記
 - 山高水長圖記序(五一一) 著者風雲爪書(五一一) 古香公の江戸邸(五一五) 岩村風雲書(五一五) 龜王山義門寺遺書(五一五)
- 古香先生の中尋小學嘉言録
 - 中尋小學教科書(五一六) 古香公詩鈔(五一七) 佛堂日向地學歌等(五一九) 實業生と宣教師(五二二)
- 竹窓城勳先生遺文
 - 勳大人草存(五二二) 竹窓先生に就て(五二四)

安素堂遺稿抄
耳水先生の自筆本(五二五) 耳水先生傳(五二七) 此花日記、荒川馬子(五二九) 高鍋藩學制(五三七)

日高梅瀬先生遺文
誠實先生御自傳(五三八) 遺文目次(五三九) 千里亭記等々(五三九)

佃庵先生の海防臆測上梓
山縣有朋、豊海舟序(五四二) 秋月權輔序(五四二) 門人坂巻素枝(五四三)

舊志に據れる筑前秋月家の研究
泥谷翁序及び目次(五四四)

皇國小史及び附圖
高鍋の豊浦編年(五四六) 神武天皇の御東遷(五四七) 行宮書教料書(五四七)

都城史料庄内平治記
宮時圖書館藏寫本(五四八) 平治記目次(五四八)

都洲集と都城諸先人の歌詠
大前晴壽先生序(五五一) 八田知紀書(五六五) 都城以外の出跡(五六五)

日向纂記の刊本と御自筆本
六國誌記(五六七) 明教堂創建の事(五六八) 明教堂記(五六八) 振興堂創建(五六九) 滄洲翁を紙肥に(五六九) 李韓比左衛門事(五七〇)

平部昭南翁序(五七二) 小村具輔翁題(五七四) 日向纂記例言(五七五) 宮澤教授の大書(五七五)

胤康召捕一條書附控
他見を禁じた轉錄(五七六) 勤王史蹟胤康和尙(五七七) 内藤氏父子の誓心(五七八) 東海藩出船(五八二) 和尙を引渡す(五八四)

大塚先生御記述の本藩實錄(五八八)

佐土原より江戸迄の旅日記(五九一)

秋月長門守領内古圖(五九八)

圖 版 目 録

卷 首

天孫御降臨之圖
第一 磐原誌風姿(三)

神武天皇尊影
第二 磐原誌目録(五)

神武天皇尊像
第三 磐原誌一葉(七)

神武天皇御陵圖
第四 磐原誌一葉刊記(九)

第五 長善寺址地圖(一一)

第六 マサキノキノ地圖(一一)

第七 長善寺繪圖(一七)

第八 長善寺址風景(一九)

第九 長善寺址略圖(一一)

第十 長善寺碑(二五)

第十一 墓碑文拓影(二八)

第十二 墓碑文拓影(二八)

第十三 長善寺の仁王(三三)

第十四 仁王尊像背文(三三)

第十五 聖分國略序(三五)

第十六 聖分國略第一葉(三七)

第十七 佐土原城(四三)

第十八 田島ごんの墓(四四)

第十九 大光寺正門(四五)

第二十 弓削氏系圖の一部(四六)

第二十一 弓削氏の墓(四七)

第二十二 南浦文集目録(五一)

第二十三 梓老繪算草伏點算(五一)

第二十四 南浦文集跋(六三)

第二十五 南浦文集刊記(五五)

第二十六 禮樂集の一部(五七)

第二十七 露沾公遺稿(六一)

第二十八 政樹公遺稿(六三)

第二十九 日講上人遺影(六五)

第三十 延問の探遺地圖(六七)

第三十一 野田泉光院遺文(七〇)

第三十二 帝位考題(七三)

第三十三 ローマ法王に呈せる書(七七)

第三十四 詩史題(八一)

第三十五 喫茶養生記標題(八四)

第三十六 孟子浦義題(八七)

第三十七 息軒遺稿標題(八九)

第三十八 如蘭集第一葉(九一)

第三十九 息軒先生遺稿(九三)

第四十 日向私史標題(九四)

第四十一 三字經標題(九七)

第四十二 史略標題(九九)

第四十三 神武紀集解刊記(一〇二)

第四十四 郡洲古圖(一〇三)

第四十五 官幣大社宮時神宮(一〇七)

第四十六 鳴之口書記録の一部(一〇九)

第四十七 左傳註釋序(一一)

第四十八 志濃武草卷末(一一)

第四十九 橋門遺稿刊記(一一五)

第五十 如蘭集跋文(一九)

第五十一 論語集說自序(一一)

第五十二 鎌内啓蒙の二部(一一三)

第五十三 論語註疏題(一二五)

第五十四 耳水編二先生(二二九)

第五十五 息軒先生遺稿(二三)

第五十六 神武紀集解題(一三三)

第五十七 神武紀集解刊記(一三五)

第五十八 神武紀集解標題(一三七)

第五十九 佐土原藩藏版之章「朱印」(一三八)

第五十九 高鍋藩學の額(一四一)

第六一 古香先生遺影(一四三)

第六二 學習館藏版章「朱印」(一四四)

第六三 鴻爪詩集の版本(一四七)

第六四 梅瀬先生父子遺影(一五一)

第六五 城竹原先生遺影(一五三)

第六六 日講上人の遺稿(一五五)

第六七 秋月天放翁遺影(一五七)

第六八 高鍋藩學明倫堂址(一六〇)

第六九 明倫堂の額(一六三)

第七〇 古香公詩鈔(一六五)

第七一 宮時軍記抄(一六七)

第七二 日向海邊圖(一六九)

第七三 左傳註釋序(一七三)

第七四 鴻爪詩集第一葉(一七四)

第七五 城先生遺稿(一七五)

第七六	上村氏系圖の一部(一七六)	第七七	息軒遺稿(一八三)	第七八	梅淵翁遺墨(一八五)	第七九	六百番誦讀發句會(一八九)
第八〇	昔の所習スリ(一九一)	第八一	天放先生遺墨(一九三)	第八二	孟子刊記(一九五)	第八三	家禮讀語(一九七)
第八四	四書標題及序(一九九)	第八五	論語註疏題簽(二〇一)	第八六	論語統編(二〇三)	第八七	日向海邊圖(二〇七)
第八八	論語統編の一部(二一一)	第八九	雙石先生の論語統編(二一三)	第九〇	誦讀發句會の一部(二一五)	第九一	藩學振徳堂の一部(二一七)
第九二	明治堂藏書印(二一八)	第九三	如蘭集第一編(二二二)	第九四	雙石先生周易統編(二二三)	九五	古香先生遺墨(二二五)
第九六	詩話碎金二種(二二九)	第九七	治亂記第一編(二三三)	第九八	小阜山水畫帖の一部(二三三)	九九	同上(二三五)
第百	同上(二三七)	一〇一	竹鼻翁遺墨(二四〇)	一〇二	探源記題簽(二四三)	一〇三	古香先生遺墨(二六九)
一〇三	日向記卷第一(二七七)	一〇四	初代廣重の版畫(二七五)	一〇五	日向記題簽(二七七)	一〇六	紙肥藩學振徳堂の額(二八一)
一〇七	讀書餘瀝口翰(二八三)	一〇八	治亂記第二編(二八六)	一〇九	論語註疏讀語(二八九)	一一〇	吳倉の老人村(二九三)
一一一	日向墓記序(二九七)	一一二	息軒先生遺墨(三〇一)	一一三	李門公遺影(三〇五)	一一四	學問士風二種(三一〇)
一一四	小阜山水畫帖の一部(三一一)	一一五	日講上人遺影(三一四)	一一六	李門公遺墨(三一九)	一一七	日講上人遺影(三二二)
一一八	鴻爪詩集卷末(三四五)	一一九	孫欽軒純粋目錄(三五九)	一二〇	鳴之口混雜御取換(三九一)	一二一	同書の一部(三九四)
一二二	同書の一部(三九七)	一二三	日向海邊之圖(四〇〇)	一二四	九峯修行日記(四〇八)	一二五	小學外書刊記(四一三)
一二五	小學卷末讀語(四一三)	一二七	家禮讀語(四一五)	一二八	家禮卷末讀文の後半(四一五)	一二九	山崎點四書(四一六)
一三〇	大學題簽(四一七)	一三一	四書刊記(四一八)	一三二	大谷氏製本記(四一八)	一三三	四書の遊印(四一九)
一三四	如蘭集標尾(四二七)	一三五	論語統編の一部(四三二)	一三六	雙石先生遺影(四三四)	一三七	鴻爪詩集標尾(四四五)
一三八	雙石先生藏書印(四四六)	一三九	鴻爪詩集序(四四七)	一四〇	鴻爪詩集第一編(四五二)	一四一	雙石先生藏書印(四五三)
一四二	栲山讀文(四五五)	一四三	産帳序及び目錄(四六三)	一四四	産帳及及び刊記(四六五)	一四五	中洲先生の息軒評(四七二)
一四六	志道武草題簽(四七五)	一四七	息軒先生遺影(四七八)	一四八	斑竹山房之印(四九二)	一四九	息軒遺稿刊記(四九五)
一五〇	讀書餘瀝題簽(五〇三)	一五一	勳大人草存題簽(五二二)	一五二	梅淵先生遺墨(五三八)	一五三	日向記第一編(五六六)
一五四	内藤子爵御給讀(五七六)	一五五	胤康和尙人相書(五七九)	一五六	本邦買録序(五八八)		

昭和九年十月二十五日印刷
昭和九年十月二十五日發行

(非賣品)

著 者	宮崎市高千穂通二丁目 若 山 甲 藏
印 刷 者	宮崎市高千穂通二丁目 壹 岐 晴 繁
印 刷 所	宮崎市高千穂通二丁目 平 和 印 刷 所
發 行 者	宮崎市高千穂通二丁目 若 山 靜
發 行 所	宮崎市高千穂通二丁目 日向文獻史料發行會 (電話四六〇番)

10.29

終

